

2022年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

( 春期・社会人特別選抜 ) 問題

筆記試験 日本文学 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

|        |  |
|--------|--|
| 受験記号番号 |  |
|--------|--|

|   |  |
|---|--|
| 成 |  |
| 績 |  |

2022年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(春期・社会人特別選抜) 問題

筆記試験 ( 日 本 文 学 専攻分野)

- (注意事項) ① 第一問の解答は、答案紙十七行程度を標準とする。
- ② 第二問 1から5までの解答は、それぞれ答案紙七行程度を標準とする。
- ③ 第一問・第二問・第三問ともに縦書きで解答する。

1. 大学院で、自身が研究しようと考えているテーマとその目的および研究方法について述べて。

二、次の事項について説明せよ。

1 『萬葉集』の貧窮問答歌

2 『采花物語』の内容と特質

3 『古今著聞集』の構成と内容

4 北村季吟

5 白樺派の文学

三、次の文章は、『俊頼髄脳』の一節である。これを読んで、後の問い（問Ⅰ・Ⅱ）に答えよ。

為時と申す儒者の子に、惟規と申すものありき。<sup>①</sup>親の、越中の守になりてくだりける時に、蔵人にて、えくたらず、かぎり賜はりて後に、まかりけるに、道より、病をうけて、こもつまければ、かぎりになりけり。親、待ちつけて、よろづにあつかひければ、やまもりければ、今は、後世の事を思くとて、枕がみに添ひゐて、

「後世の事は、地獄、ひたふるになりぬ。中有といひて、まだ、ただまらぬ程は、はるかなる荒野に、とり、けだものなどたになきに、ただ一人ある心細さ、この世の人の恋しき、堪へがたき、推しはからせ給く」

といひければ、目をほそめに見あけて、いきの下に、

「その中有の旅の空には、風にたくる紅葉、風にしたがる尾花などのもとに、松虫、鈴虫の声など、聞えぬにや」

と、<sup>②</sup>ためらひつゝいひければ、僧にこそあまりに、あらうかに、「何の料に尋ぬるぞ」と問ひければ、「あらば、それを見てこそはなぐさめぬ」とうち休みていひければ、僧、このこと物ぐるほしとて、逃げてまかりにけり。ある人の心はくもありけりと、しるしめをむ料に、やくなけれど申すなり。親ありて、なほはたらかむ限りはと、思ひて添ひゐて、まもりければ、二つの手をそめて、かよりければ、心も得で、見ゐたりけるに、物書かむとおぼすにやと、人の心を得て、問ひければ、うなづまければ、筆をぬらして、紙を具してとらせければ、書きたる歌、

<sup>③</sup>みやこには恋しき人のあまたあればなほこのたびはいかむと思ふ

はての、ふ文字を、え書かでいき絶えにければ、親こそ「そなめり」と申して、ふ文字をば、書き添へて、かたみにせむとおきて、常に見て泣きければ、涙にぬれて、はては、やれ失せにけりとかな。

問一 傍線部①～③を、それぞれ口語訳せよ。

①

②

③

問二 右の逸話の眼目はどこにあると考えられるか。本文に即しつつ自身の考えを述べよ。適宜、本文を引用しつつ説明するよう。

受験記号番号

6 / 6